

## 若冲ワークショップ第四回

「染織 - 若冲の時代から伝わる染織」

尾道市立大学日本美術史講師 市川彰さん

18世紀京都画壇を中心とする江戸時代絵画史の研究者

今日は若冲と染色との関わりについてモザイク屏風を中心にお話します。「モザイク」という言葉が若冲の生きた江戸時代からあったわけではありません。研究者によっては「升目描き」という言葉を使う人もおり、技法的な呼び方は特に決まっていません。今回は「モザイク」という言い方を使います。

### ◇ 3つのモザイク屏風

モザイク屏風については、様々な意見があり、研究者間で見解が分かれています。まずは、3つのモザイク屏風について見ていきましょう。



#### ● 「鳥獣草花図屏風」プライス氏所蔵

この作品は、2006年京都国立近代美術館で開催された「プライスコレクション 若冲と江戸絵画」および、最近では2013年仙台、岩手、福島など東北を巡回した「若冲が来てくれました プライスコレクション江戸絵画の美と生命」展で展示されました。

不思議な絵です。樹木が茂り背景は海のように、たくさん動物が描かれ、獅子がひっくり返っている様子まで描かれています。その中でひととき目立つのは大きな白い象です。真正面を向き可愛らしい眼、背中には敷物を載せています。

モザイク屏風は、約1センチの四角形の升目の中にいろいろな色や模様を重ね塗り分けて描かれています。黒、青、茶色、白と様々な色を使い、遠くから眺めた時と近くで見た時ではまた別な楽しみ方のできる絵です。

右側に動物、左側に鳥が集められています。鳳凰が上を向いています。

この作品を所蔵しているプライスさんの自宅のシャワールームにはこの絵をモチーフにしたタイル画が施されています。スズメ、孔雀、シギなど様々な小さな鳥も細かく塗り分けられています。中でも私はカワセミが一番きれいだと思っています。

#### ● 「樹花鳥獣図屏風」静岡県立美術館所蔵

構図としては一見、プライス氏所蔵の「鳥獣草花図屏風」と非常に似ています。木があり水があり象がいて、その周りに集う動物たち、左側には鳳凰を中心に群れ集う鳥たち。

しかし、よく見てみると違います。たとえば、獅子の目のところに着目すると、獅子と背景の水との塗りわけがはっきりしない、鳳凰の尾羽の描写もプライス氏所蔵の方が丁寧だと感じます。



#### ● 「白象群獣図」

象を中心に何匹か動物が描かれていますが数は少ない。升目を機械的に塗り尽くしており丁

寧できりっとした印象を受けます。濃淡が一定規則的に塗り分けられています。輪郭もはっきり見ることができます。

- 「釈迦十六羅漢図屏風」現在、所在不明

昔、大阪の博物館が所蔵していたとされる作品です。獅子、動物、釈迦、十六羅漢、象が描かれています。

- ◇ 作品を見比べてみると

色の発色を比べてみると、プライス氏所蔵の作品はぴかっとしているのに対し、静岡県立美術館所蔵のものはくぐもっています。

この3つの作品について、研究者の中には若冲・作とする人と、若冲ではない人物が描いた作品であると指摘する人が居ます。

現在の美術史の中では、プライス氏の作品は若冲・作ではないとする考え方が多いです。静岡県立美術館の作品の方がより若冲が関わったとする考えもあれば、プライス氏所蔵の作品の方がよりかかわったという人も居ます。また別の人は静岡県立博物館よりもプライス氏所蔵の方が素敵だという人も居ます。

私個人としては、プライス氏所蔵の作品も若冲と認めていいと思います。ただし、この作品では、印鑑が切り取って貼ってあるところが議論を呼んでいます。若冲が描いたとしたら印鑑を押すでしょうし、描く際に印鑑の部分をなぜ空けておかなかったのかという疑問も残ります。もっとも、絵画作品であるから後から貼り付けた可能性もあります。

これらの作品の真贋について議論するのもいいですが、私にはまだ結論が出ていません。批判されることの多いプライス氏所蔵の作品も素敵な作品だと思っています。

今日は、真贋を問う前にこの世に生まれた一作品としてこれらの作品について考えてみましょう。

- ◇ 絵画作品としてのモザイク画

- モザイク画発想の原点

若冲の升目、モザイク的な作風について、金沢美術工芸大学の卒業論文でいずみみほさんが、この作品の発想の源は染色の中でも織物にあるとする考えを提案されました。織物を作るときは、まず図案を描き、次に方眼紙に載せて図案を描き、さらに色事に分けていきます。この方眼で表されたものと文様が、モザイク屏風画の発想の原点にあるのではないかと、という見解です。私はこの見解がもっとも近いのではないかと考えています。

若冲の親戚に織物関係者が居て織物の図案を描く工程を見る機会があったらと推測できます。

- モザイク画の手法

では、若冲はどのような効果を求めてモザイク画という手法を選んだのでしょうか。ものを近くで見る感覚と遠くで見る感覚は違います。モザイク画は織物を遠くから見た感覚に近いと思われます。小さな升目毎に塗り分けられたものを遠くから見るとモチーフとして見えます。若冲は、織物的な目触りの面白さを表現したかったのではないのでしょうか。私は、この若冲の作品を、織物の下絵としてではなく絵画作品として認めたいと考えていま



す。

#### ●モザイク屏風画と涅槃図

動物がたくさん居るこの作品は、静岡で行われた展覧会では「仮想の楽園」というタイトルが付いています。では、これはすべて仮想なのでしょうか。私は決してそうではないと思います。

なぜ動物たち鳥たちが集められてこのような形になっているのか考えてみましょう。

まず、象に注目してみると、背中に敷物がかけられています。

これは、敷物の上に誰かが乗ったり、何かが置かれたりするのではないのでしょうか。

相国寺に「動植彩絵」とともに寄進された「釈迦文殊普賢三尊像」図があります。この図の中では、お釈迦様は台座に乗り、文殊菩薩様は獅子の上に、普賢菩薩様は象の上に乗られるというルールがあります。つまり、先ほどの象も菩薩様を乗せる存在として描かれたのではないのでしょうか。こういった象を若冲はすでに別の作品で描いています。

ところで、静岡県立美術館所蔵作品の象には敷物がありません。一方、プライス氏所蔵の作品に描かれた象の背の敷物は、なんらかの仏様を乗せるためのものであると認識しておきましょう。かつ、動物たちがたくさん集められて描かれる絵画は「涅槃図」です。涅槃図とは、北枕で横たわるお釈迦様の入滅を動物鳥が集い悲しみを表現した仏教画です。

しかし、一般的な涅槃図、たとえば鎌倉時代の涅槃図は、「モザイク屏風画」ほど、たくさんの動物は描かれていません。東福寺には高さ約12メートルもある大きな涅槃図があります。室町時代の画僧・吉山明兆(きつさんみんちょう)の作品です。江戸時代になると涅槃図のバリエーションが増えていきます。



#### ●日本各地にある様々な涅槃図

「涅槃図」曹源寺(岡山県)所蔵

ニコブらくだ、龍、ヒヨウ、白狐などモザイク屏風画に通じるような、ぐにゃつとした虎など上手いわけではない形が描かれています。蛇やカニやカタツムリ、鳳凰、孔雀、猿、丸い模様のついた獅子などが居ます。

「涅槃図」少林寺(岐阜県)

釈迦が横たわったそばに動物たちが集っています。

「涅槃図」常保寺(東京都)所蔵

やはり上手に描けているわけではない動物たちが描かれています。

これらの涅槃図を集めて、動物ごとに分析してみると、若冲のモザイク屏風の動物たちとの間に何らかのラインが見えてくるのではないのでしょうか。

この涅槃図では、象はひっくり返り、お釈迦様の入滅を悲しみ苦しげなポーズをしています。さらに、地面に注目すると、涅槃図の中には水を描いたものもあります。地面があり木が生えて背景には水が広がっています。このように美術史の中における涅槃図を広く押さえると若冲のモザイク屏風作品との共通項を見つけることができます。

### 「涅槃図」真如堂（京都府）

白い陸地のようなものが描かれています。水辺で涅槃に集う動物たちが描かれています。これは、あのモザイク画を描いた人の発想源になったのではないのでしょうか。

### 「涅槃図」大師寺（滋賀県）

ここの涅槃図は、地面か水かも良く分からないようにブルーで背景を処理してあります。釈迦の入滅に際し動物、鳥が集っています。

このように様々な涅槃図を見比べると大変興味深いです。とかく日本の仏教美術史は、平安・鎌倉時代の美術に比べると江戸時代への関心が薄いようにも思われますが、もっと作品を掘り下げて見ていく必要があります。

モザイク屏風を単にバーチャルであるとか、画家の空想であると終わらせるのではなく、丹念に違いを見ることによって、その独創性を見出すことが出来ると思います。

### ●「百鳥図」中国明時代

それぞれのモチーフは、涅槃図がイメージの元として認められるかもしれない。

鳥は簡単な答えがすでに見出されています。中国明時代（1368～1644）に生み出された「百鳥図」です。鳳凰を中心に群れ集う鳥たちがモチーフになっており、他にも似たような作例を見出すことができます。このまとめ方が成立する一つの根拠になったであろうと思われま

す。

### ●「花鳥獸文様刺繍内式」（滋賀県西教寺）

滋賀県西教寺には、仏さんが立つ台がありますが、そこにかぶせる絹の織物・花鳥獸文様刺繍内式に鹿、虎、鳳凰、山羊などめくるめく世界が刺繍されています。そうすると、若冲のモザイク屏風は、涅槃図のみならず中国明時代につくられた刺繍作品も源として考える必要があります。若冲との関係で言えば、相国寺にも内式が残されています。これら内式の緩んだ形の象や鶴、花々を埋め尽くす画面構成などはモザイク画の発想源の一つであった可能性があります。

### ●丸山応挙「群獸図屏風」宮内庁三之丸尚蔵館所蔵

この作品は六曲一双の屏風です。鹿、虎、豹、熊、そして象をはじめたくさんの動物がいます。応挙のこういったまとめ方は、若冲のモザイク画を参考に作ったのでしょうか。若冲は1716年生まれ、応挙は1733年生まれですから、歳の差が若干あります。若冲のモザイク画と応挙の絵はかけ離れすぎていますから疑問があります。さらに涅槃図を探してみましよう。

### ●涅槃図を探していくと...

#### 「涅槃図」（三重県・専修寺所蔵）

象、牛、虎、鹿、猫、蛇、兎が描かれています。これも作者の名前が残っていません。丸山応挙に習った長沢蘆雪も含めて考えなければなりません。この江戸時代18世紀の絵師たちは、誰もこういうものを学び描いた経験があると考え、もしかすると、この涅槃図と共通する何かがあり、これが生み出されたのではないかという推論が一つできます。ちなみに、この寺のもう一つの絵には、水辺



が描かれ獅子や鶴など動物が集っています。仏画から涅槃図をモチーフにした作品が生み出されたと言うことが許されるなら、モザイク屏風においても他のものから、こういった世界が生み出された可能性は捨てきれないと思います。先ほどの円山応挙とは別ルートでの流れを考えた方がいいのではないのでしょうか。

#### ● 織物曼荼羅図

「織物の蓮曼荼羅図」秋田・西来院

蓮の花をモチーフに織り込んだ仏教的な作品です。水、木々があり、動物たちが居ます。織物で表された動物たちは、京都の西陣から織り手を秋田に連れてきて織らせたというのが資料から知られています。秋田では、養蚕産業振興のために織物涅槃図を奨励したようです。そこで、京都西陣織の名工村上氏を京都から呼んで織物の涅槃図を作らせました。京都における織物の涅槃図を表現できる環境にあったということです。とすると、もしかすると、織物から涅槃図を引っ張ってくるという可能性もあるかもしれません。

織物で表現される際にできる升目の角々した表現がモザイク画制作のきっかけとしてあったのではないかと。もちろん織物だけでなく、清水寺に所蔵されている刺繍の涅槃図にもたくさん動物や鳥が集う姿が描かれています。

結論は言えませんが、絵、織物、刺繍、涅槃図、動物たち、鳥たち、そういったキーワードでもっと深めていくことができる絵画です。

#### ● 最後に

想像にすぎませんが、モザイク屏風は、これで世界は完結していないのではないかと私には見えます。この一対をつなぐ何か、例えば普賢菩薩様が乗せられているのではないのでしょうか。もっとも反対側に文殊菩薩様が乗る獅子が描かれていないのが痛いところですが。あるいは似たような表現の仏画が存在して、初めて鳥たち動物たちの屏風が一つの世界を形作るのではないのでしょうか。これは、私がこれから調べていくところの見取り図です。明らかに獅子や象、普賢・文殊が示されていますが、もしかするとモノがなくて考え方だけかもしれませんが、こういった掛け軸などのモザイク描法を使った釈迦・文殊・普賢、釈迦十六羅漢、あるいは涅槃図なのかもしれません。こういった間をつなぐ何かを感じて研究を続けています。

#### Q&A

##### Q

「動植彩絵」と涅槃図を比較した先攻研究はあるのか？

##### A

「動植彩絵」は釈迦、文殊、普賢の元時代の仏画を模写していたということは知られていますが、若冲の「動植彩絵」の絵としての世界を、仏画と関連づけて、動物や虫植物など世の中のすべてに仏性があるという考え方以外に、形の面で対応させている研究を私は知りません。

「動植彩絵」に限って言うと、いきなり仏画の中から探してい



くよりは、若冲が活躍する少し前に長崎を通じ中国から相国寺はじめ様々な寺院にもたらされてきた元・明・秦時代の絵画を対象にして考える方が分かりやすいと思います。「動植彩絵」涅槃図を比較してというのは難しいと思います。

Q

涅槃図は、釈迦入滅の際に極楽の世界、説法を聞いている図と理解していますが、説法図との関係ではいかがですか？

A

釈迦説法図では、古いところでは奈良時代ボストン美術館所蔵の作品があります。しかし、私がこの絵の間に何かあると言ったとき、釈迦十六羅漢や釈迦説法図も可能性のあるものだと思います。ただ、説法を聞いているようにも私は考えきれていません。しかし説法を聞くかどうかは別にして、仏様なりの庇護を受けたこの楽しい世界というのは、考える上でのきっかけなのかもしれません。江戸時代の釈迦説法図をすべておさえているわけでないのはっきりとは申し上げられませんが、釈迦は現世を統括する仏様なので、これが現世に生きるものであるならば、それを統括している真ん中に来る仏様のお一人だと思います。

Q

ミホミュージアムで開催された「若冲ワンダーランド」以降、何か若冲作品に関して新たに発見されたものはありますか？

A

今発見されていてもニュースにはならず、展覧会に合わせて発表されるのではないのでしょうか。

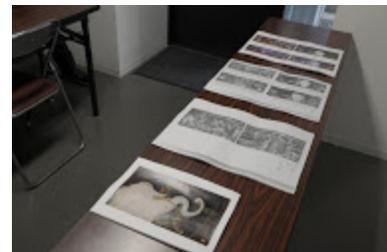
この錦市場周辺を丹念に調べていけば一本くらいは何か見つかると思います。それくらい京都は、美術土壌・環境は深いものがあり、新たな展覧会が組直されるということがあります。

Q

先生は、この二つの絵の間に何かがあるのご指摘されました。実は私は、これで完成型だと考えます。というのも、動物たちが空想され作られた図ではないか。ここに仏様が入ると、こちらの世界が壊れてしまうのではないか。

A

モノとしてあるのか、考え・思想としてあるのか、大きく分かれるところだと思います。私はモノとしてあってほしいと思いますが、私のように考えるのは少数意見かもしれません。私が歯切れの悪い言葉で「動植彩絵」を考えて構造を当てはめています。釈迦文殊普賢が真ん中にあり、動植物の絵で取り囲むという構造を見ると、動・植物の絵で囲まれる真ん中には居てほしいなという願望です。



Q

涅槃図はお釈迦様があの世へ行かれる、この世とあの世の境目の状況を表しているように思えます。お釈迦様の涅槃図には、木々が片方は青々として、片方は枯れ木が描かれることもあります。

A

涅槃図は、釈迦が入滅する状況を説法してくれるお話を聞き、絵画を見てその悲しみを共有する絵です。こういった動物の種類はおそらく平安時代の「冒瀆涅槃図」と言われる国宝のものが描かれていませんが、蛇が加わるなどどんどん種類が増えていっているような気がします。

Q

涅槃図は、沙羅双樹の葉の色が違うのです。この絵は同じですが。鎌倉時代のものは木々の葉の色が違います。死んでいく世の移り変わりを表しているのです。

先生

なるほど。一つ、面白いヒントを頂きました。

天界にいらっしゃって、釈迦が入滅する際に間に合わないというお話でしたね。仏画を見ているとポップでキュートな世界からは離れていってしまうように思われますが。こういった動物・鳥たちがたくさん描かれた図像としては私は涅槃図が一番近いかなと思っています。

最後に、私の言ったことが、その通りだと思わないようお願いいたします。「あの人はああ言っていたけれど、私はこう見る」と一番に見て思ってもらえればうれしいです。



#### 【編集後記】

若冲の代表作モザイク画を「涅槃図」というキーワードで読み解く試み。たくさんの動物が登場する涅槃図と若冲作品にはどのような影響関係があるのか、謎解きのプロセスの一部を教えていただいたように思いました。今後の先生の研究経過が楽しみです。